

アジアで会う *Talking in Asia*



實原享之さん アイ・グローバル社長

第60回 「第2の故郷」で人材育てる (ベトナム)

じつはら・たかゆき 1983 年生まれ、神奈川県出身。神戸大学工学部建設学科を卒業後、一部上場不動産会社に入社。2009 年に米国公認会計士試験に合格し、I-GLOCAL (アイ・グローバル) に転職した。入社後すぐにベトナムに赴任し、10 年にはベトナム公認会計士試験にも合格。12 年から現職。仕事の付き合いで始めたゴルフにはまり、毎週末汗を流す。



「この先、何十年とベトナムで暮らしていくことになるでしょうね。骨をうずめる覚悟もできています」。会計税務コンサルティング会社アイ・グローバルの社長として、日本企業のベトナム進出や合併・買収 (M & A) の支援、進出後の税務・人事労務・会計監査といった業務を手掛ける。ベトナムに進出する日系企業約 2,000 社のうち、顧客は 600 社を超える。自ら講師となり、現地法人経営者向けの税務・会計セミナーも開催している。

「経営者になりたい」

大学在学中は勉強よりもアルバイトにいそしみ、「起業して経営者になりたい」という夢を抱くようになった。「日本で起業するには競争が激しく、隣国の中国では既に日系企業の進出が進んでいる。日本人の強みが生かして、マーケットの拡大に期待できる場所ということで、東南アジア諸国を回りました」。中でも、ベトナムは伸び代が大きく、自分の肌感覚にも合い、直感的に「起業するならここだ」と思ったという。

大学卒業後、すぐに起業するわけにもいかず、東京で不動産会社に就職。営業と経理を担当した。しかし、入社から 2 年後に会社が倒産。思いがけずフリーになり、再び「起業」の 2 文字が頭をよぎった。

「経営者になるためには、会計・税務についても熟知し

ておかなければならない」と思い、専門学校のプログラムを通じて猛勉強。予備知識はなく、一からのスタートだったが、「必要に迫られていたので、勉強は全く苦になりませんでした」と当時を振り返る。努力が実を結び、勉強開始からわずか 5 カ月で米国公認会計士試験に合格した。

20 代で社長に就任

公認会計士の資格は取ったものの、ベトナムで就労経験がないまま起業するのは難しいと判断。ベトナムで働けることを条件に求職し、2009 年にアイ・グローバルに入社した。最初の 1 年間は、同社の創業者である蕪木優典氏と寝食を共にし、ベトナムで経営ノウハウを学んだ。

10 年に日本人では 4 人目として、ベトナム公認会計士試験に合格。12 年に 28 歳という若さで社長に就任した。自ら起業したわけではないが、「経営者になる」という夢は実現した。今年から共同出資者となり、尊敬する兄のような存在の蕪木氏と共に生涯アイ・グローバルを成長させ続ける覚悟という。「理系で会計・税務とは無縁でしたが、資格を取得し、会計税務コンサルティング会社の社長を務めている。人生何が起こるか分からないですね」。

新卒者のみ採用

アイ・グローバルグループの社員数は、ホーチミン事務所が約 180 人、ハノイ・ハイフォン事務所が約 100 人に上る。大学で会計学を専攻した新卒者のみ採用。社員の平均年齢は 25.5 歳と若い。「他社で実務経験を積んで、そのやり方に慣れてしまった人材を採用するよりも、新卒者を一から育成する方が意外と効率がいい」と語る。

「採用する際に『3 年たったら辞めてくれ』と伝えているんです」。3 年後に解雇するという意味ではない。どこでも通用する一人前の会計・税務コンサルタントになってほしいとの思いからだ。ただ、その道のりは決して平たんではない。「毎年、新卒者を 30 人ほど採用するが、入社から 3 年以内に半数近くが挫折する。社内でマネジャー級に出世する人は 1 ~ 2 割程度、経理や総務として顧客企業に転職する人は 3 ~ 4 割程度にとどまる」という。

今年 10 月頃には、南部ビンズオン省にも事務所を開設する予定。「この 6 年間、ベトナムという国や社員、お客様に支えられ、自身も成長してきました。ベトナムで若く有望な人材を育てるとともに、日本企業の進出を支援することで恩返ししていきたいです」。感謝の気持ちを胸に、「第 2 の故郷」で若き社員たちと共に日々業務にまい進していく。(ベトナム編集部・本田香織)